

2022年12月25日 クリスマス礼拝

説教題「宝の箱を開けて」 マタイによる福音書2章7～12節

主任牧師 加藤 誠

**「家に入ってみると、幼子は母マリアと共におられた。彼らはひれ伏して幼子を拝み、宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬を贈り物として献げた」(マタイ福音書2章11節)。**

マタイ福音書のクリスマス物語には、対照的な人物が出てきます。東の国から来た占星術の学者たちと、ヘロデ王です。喜びを生きる学者たちと、不安と疑いを抱えて生きるヘロデ王と。その姿は実に対照的です。

「東の国」とは当時のペルシャの国で、「占星術の学者」とは天文学を良く学び、星の動きから神意を人々に告げる役割を担った人々のようです。2年前の2020年12月に、木星と土星が約400年ぶりに大接近してほぼ一つの星に見えて大きく輝いた出来事がありましたが、イエス・キリストの誕生の時にも、木星と土星の大接近があって、その大きな輝きを見つけた学者たちが「新しい王の誕生」を告げる出来事だと理解したのではないかとも言われています。

学者たちは、ユダヤの新しい王は、王であるヘロデの宮殿に生まれたのだろうと考えまして、まずエルサレムの都の王の宮殿を訪ねました。「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は、どこにおられますか」(2節)。「これを聞いてヘロデ王は不安を抱いた」(3節)とあります。ヘロデ王は大変猜疑心が強く、自分の地位を脅かす人物を次から次へと抹殺するような人物でしたから、自分の知らないところでの「新しい王」の誕生は「あってはならないこと」でした。すぐに祭司長や律法学者を集めまして、メシア(救い主)はどこに生まれることになっているか、「問いただし」(4節)ます。それがベツレヘムであると聞くと「行って、その子のことを詳しく調べ、見つかったら知らせてくれ。わたしも行って拝もう」(8節)と学者たちを送り出すのです。ただこの「行って拝もう」というヘロデの言葉にはどす黒い腹の思いが透けて見えます。「もしほんとうにそんな赤ん坊が生まれたのなら放ってはおけない。抹殺してやる！」ということでしょう。

ヘロデの宮殿を出た学者たちは、不思議なことに東の国で見つけた星が「先だつて進み」、幼子の生まれた家に導かれます。彼らはその星を見て喜び、母マリアに抱かれた幼子を見て、ひれ伏し拝み、「宝の箱を開けて、黄金、乳香、没薬」をささげたのでした。今回「宝の箱」という言葉に心が留まりました。長い旅の間「宝の箱」に大切に持ち運んできた「宝」ということは、ちょっとしたプレゼント、まあまあのプレゼント程度ではない。彼ら一人ひとりにとって一番大切な「宝」を、馬小屋で貧しく生まれた赤ん坊にささげたということです。そこに学者たちの信仰の深みを感じました。自分の「宝」を馬小屋の赤ん坊のために手放し、委ねる。それはよほどの決意、覚悟です。しかも彼らは喜びあふれています。ささげられるこ

と自体を喜んでいる。喜びを生きる軽やかさを、この学者たちに感じます。

一方でヘロデ王です。彼は学者たちに比べてはるかに多くの「宝」を所有していたはずですが、不安を抱えて生きています。多くの力と富を持てたら、にこやかに、軽やかに生きれるかというところではない。どうも逆です。いつ、だれが、自分の地位を狙い、脅かすか分からない。自分が手にしたものを失う不安にいつも脅かされている。人を疑い、不安を抱え、危険な人物を排除する。そこには安らぎはないし、喜びもない。心の底から笑うことができないのです。

それに対して、学者たちは、この世界に働かされている神の働きを見出して、その神を喜んでいくことを何よりも大切に選び取りました。彼らが不思議な星に導かれて見つけたのは、貧しい赤ん坊でしたけれども、その赤ん坊こそ「インマヌエル」、この暗闇多き世界において「我らと共に生きる神」の姿であることを知った時、彼らの心は深い喜びで満たされたのです。三人は大切な「宝もの（黄金、乳香、没薬）」を手放しましたが、もっと大きな宝を見出したのです。「インマヌエル」。毎日、この世界に暗闇をつくり出している罪深き私たち人間と共に歩まれる神。私たちにとって本当の宝である「イエス・キリスト」を見出すことができたからです。

主イエスは「何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと言って思い悩むな。まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる」（マタイ 6：33）と言われましたが、まず「神の国と神の義」を求めた東の国の学者たちは、喜びにあふれて軽やかに自分たちの国へと帰って行ったのでした。

私たち人間にとって食べるもの、着るもの、住むところは大切です。けれども第一のものを第一にしていく。「インマヌエル」、我らと共にある神さまの言葉と働きをまず第一に受けていく。そのやわらかさを大切にしたいのです。

このマタイのクリスマス物語には、ヘロデ王と占星術の学者たちの間に、聖書を勉強している学者たちが出てきます。彼らは知識としてはベツレヘムにメシアが誕生することを知っていましたが、自分で行動を起こすことはしませんでした。「預言といっても 500 年以上の前のこと。けれどもこの 500 年間何も起こらなかったのだから、今さら何か起こるとは思えない」と思ったのでしょう。聖書の学者たちは「これまでの経験と自分の判断」を優先して「今日、自分に語りかけられている神の言葉」に心と体を向けようとしなかったのです。これは信仰生活が長い者、毎年クリスマスを迎えている私たちにも言えることかもしれません。私たちが自分の経験と判断の枠の中だけに立とうとする時、今日、語られる神の言葉を聞き逃してしまうのです。東の国の学者たちのように、今日、自分たちに語られている神の言葉を、やわらかく新鮮に受けて、行動していきたいのです。なぜなら二千年前のことだけでなく、今日、インマヌエルの主であるイエス・キリストが私たち一人ひとりと共に歩んでくださっているからです。クリスマス、おめでとうございます。